連載・バイオマス

ふるさと Something NEWS

第⑫回

老舗企業のもつ地方文化と継承
――老舗日本酒蔵元の訪問記

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人efco.jp
代表理事 佐藤 建吉

▼日本の老舗

「地域デザイン学会」という地域社会をグローバルな視点で構築、制度設計のため研究、意見交換する団体がある。ローカルの中にグローバルの視点を取り入れ、池の蛙にならないように、多面的・現代的に、広範な活動を行っている。筆者もその会員あるが、未来のあるべき姿を、切り口として提案している。

地方には、代々つながっている老舗が多い。老舗とは、100年以上の歴史をもつ店舗や会社、また組織（以上を、企業と呼ぶ）を指すようだが、インターネットによれば、その数は全国で、1000以上もあり、創業1000年以上の企業は、8社あるという。ギネス認定の最古参の企業も日本にあるという。

2014年2月に『百年企業100選―未来に残したい老舗企業』という本が出版された（東方通信社、発行）。この本は、表題のように、全国47都道府県の100社について、その歩みや特徴を見開きページにまとめている。筆者は、創業230年になる岐阜県恵那市の酒蔵、岩村醸造を取り上げ、執筆した。

岩村醸造は、「女城主」の銘柄を持つが、岩村城主が、織田信長の叔母であったことに由来する。また岩村藩家老の家系出身の儒学者・佐藤一斉との縁で、岩村の家々の玄関先には、一斉の言葉を書いた木片が掲げられている。老舗として長く継続することに、地縁や気風が後押ししているといえる。

▼地方の旧家・酒蔵探訪

老舗には、旅館、呉服屋、菓子舗などとともに酒蔵（蔵元）が多い。これらは伝統産業であり、地方の特色が生きている。筆者は、「ふるさと快活」という言葉で地域活性化の切り口としている。その例に、地方鉄道（ローカル鉄道）とその沿線の蔵元の連携で行う「鐵の道」プロジェクトがある。

それは、「鐵の道」という銘柄の日本酒を、ローカル鉄道沿線の蔵元に、「ローカル鉄道応援酒」として発売するものである。「鐵の道」については、本紙第83号（2017年7月24日発行）に、「地域資源のローカル鉄道と地酒で、地域活性化」―ローカル鉄道応援酒「鐵の道」―として紹介した。

「鐵の道」プロジェクトでは、全国の蔵元40社以上を訪ね、共通銘柄「鐵の道」の発売を依頼して回った。同時に、ローカル鉄道会社も訪問した。現在、11の「鐵の道」がリリースできたが、地方蔵元には、旧家、名望家が多い。電話番号が0006番などは、その証拠でもある。創業、320年の蔵元もある。なお、最古参の酒造は878年の茨城県の須藤本家である。

▼井出醸造店の訪問

この6月末、山梨県富士河口湖町の井出醸造店を訪ねた。今回が3度目の訪問で、店主の井出與五右衛門氏とも面会し、蔵元のほか自邸を見学した。同氏は21代目であるという。富士山麓の伏流水を仕込み水として「甲斐の開運」を主銘柄として、酒造りをしている。井出醸造店は、法人経営ではなく、個人企業であるという。

自邸は、築後300年で、座敷の襖や屏風をみると、歴史と風格を感じる（**図1**）。庭には、樹齢350年以上の松や槇の木があり、同家の繁栄を見つめてきた。座敷には、北白川宮殿下や大久保加賀守ほかの宿泊にも利用されたという。罪人の裁定の間にもなったそうで、罪人の座った石盤も庭に残っていた。

こうして、地方の蔵元は、地域の歴史の発信地でもあり受信地でもある。同時に、これまでの長い歴史において、社会の変化や変革に対応して継続してきたのである。

図1：井出家の座敷

図2：山野家の私邸

▼井出醸造店の訪問

同月に、続いて大阪府交野市の山野酒造株式会社を訪ねた。社長は山野久幸氏で創業家の5代目である。酒造量は、年間500石（90キロリットル）の手作り少量生産である。「片野桜」や「織姫の里」が銘柄であるが、酒質を変えた純米酒や吟醸酒が数多く醸されている。この地は、生駒山系伏流水が豊富で、交野市水道の7割は井地水であるという。酒造には適地である。

山野家の自邸や庭も歴史に満ちている（**図2**）。地方の旧家で、叔父は湯川秀樹博士の研究室にいたので、博士の自筆の書額もある。母屋の屋根は、そり屋根ではなく、むくり屋根（上向きに丸みをもった様式）であり、商家の風情を表しており、登録文化財となっている。庭には、神社のほか福神の石像が植木とマッチしている。

図3：富士山をデザインしたインバウンド向け酒瓶

▼時代変化への対策・対処・対応

地方文化の継承においては、川端康成の『古都』を思い出す。京都の老舗呉服屋と北山杉の地が、この小説の舞台である。北山丸太は、磨き丸太と絞り丸太があり、銘木である。木造建築・住宅の減少により、北山丸太は低迷している。呉服屋も同様であるが、デザインや新しい用途開発に挑んでいる。

『古都』では、も一つの逸話を思い出す。川端康成自筆の日本酒の銘柄『古都』である。その蔵元の佐々木酒造は、創業126年の老舗である。ここにも、「鉄の道」で2、3度訪問している。

老舗は、江戸の改革、明治維新、太平洋戦争、大震災などを経験し、主線と副線（経糸と緯糸）を織り交ぜて、事業継続してきた。インバウンド、IoT、AI、SGDs、そしてソサエティ5・0の波動の時代においても、本業の主線のほか、副線の関わりを織り込み、生き残りと発展をデザインしなければならない。ローカルの資源を活かし、グローバルな視点が必須ではないだろうか（**図3**）。